大人の英語の学び方
～認知科学の視点から～

Learning

第10回

語彙を「生きた知識」にする映画「熟見」法のススメ②

「日本語字幕」活用の利点

12月号のこのページで、日本語字幕を読みながら英語を聴くことの利点をいくつか述べた。1つは、英語の意味を理解しようとする認知の負荷が減るため、各単語を正確に聞き取ることができるようになること。そしてもう1つは、次のセリフが予測しやすくなることで、聞き取った単語や文が記憶に残りやすくなることだ。

しかし、映画「熟見」法のより大事なポイントは、日本語と英語を比較することで、構文の核となる単語、表現や語彙化のしかたが、日本語と英語でどう違うのかが見えてくることである。つまり、日本語スキーマと英語スキーマの違いに気づくことにより、語彙を「生きた知識」にすることができるのである。今月は、このことについて書こうと思う。

内容を伝える言い方は1つではない。何通りもある言い方の中で、そのときの状況に最もふさわしく、かつ相手に分かりやすく、相手の心をとらえる言い方をする。これが言語のセンスというものである。

しかし、外国語の場合、とにかく母語から外国語に「意味を移す」ことで頭がいっぱいになってしまい、この当たり前のことが見えなくなる人が多い。そうした傾向が特に受験生に多いのは、学校で「意味を移す」ような教え方をするからだろう。数学の変換式や物理、化学の公式を暗記するかのように、「日本語で○○なら英語では××」と暗記するように教えられるからだと思う。

今井むつみ（いまい・むつみ）

慶應義塾大学環境情報学部教授。専門は認知科学、言語心理学、発達心理学。1989年、慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学。1994年ノースウエスタン大学心理学部博士号取得。語彙の習得・学習のメカニズムを研究しているほか、「学び」についての認知科学の研究成果を教育現場での実践に生かすべく活動している。著書に、『ことばと思考』『学びとは何か――〈探究人〉になるために』（以上、岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）、『言葉をおぼえるしくみ―母語から外国語まで』（ちくま学芸文庫、共著）など。



「意味を移す」という呪縛を打ち破る

英語でアウトプットできるようになるためには、この呪縛を打ち破ることが必要である。報告書、提案書や論文など、プロフェッショナルな書類を英語で書く際、特にビジネスの場では、意味が通じればオーケー、では通用しない。内容もさることながら、分かりやすく、簡潔で端的な文章を書けることが必要である。自分はまだそんなレベルではない、と思っている読者の方もおられるかもしれない。しかし、そういう人こそ、教科書で習った定型文ではない言い方、自分の持っている語彙の範囲で、基本的な単語を使って英文を作ることが大事である。私自身も、英語で文章を書くときに気をつけていることは、まさにそこである。言いたいことを単語レベルで日本語から英語に移すのではなく、抽象的な命題（概念）で考え、日本語にとらわれずに、英語にする。そのときに、1つの言い方だけではなく、複数の言い方が可能かを考える。そのうえで、

最も簡潔な表現を選ぶのである。単語が出てこないから英語がうまく言えない、と言う人が多いと思うが、発想を転換して、**知っている単語の中で、なんとか言いたいことを表現する工夫**をすることが大事なのだ。そのためには、日本語を単語レベルで置き換えるのではなく、**言いたいこと全体を英語の発想で置き換える習慣をつけていくことが重要**だ。

映画のセリフがほぼ聞き取れ、頭に入ってきたら、今度は**日本語字幕から、自分ならこういう英語を書くだろうなと考える**のもよい練習だ。自分の考える英文と、プロの脚本家が書いた選び抜かれたセリフのギャップを楽しむのだ。

英語の動詞と前置詞に注目する

日本語字幕が英単語をそのまま日本語にしているわけでは決してないことにいまさらながら気づく。例えば「動くな」は“Don't move.”でもよいかもしれないが、『007スペクター』の中のジェームズ・ボンドは一言“Stay.”とだけ言う。「君を救えるのは僕だ」はつい“It is me who can rescue you.”のように高校でさんざん教えられた受験用定番構文を使いたくなってしまうが、映画では“I am your best chance of staying alive.”だ。「逮捕する」も“I will arrest you.”と訳したくなるところ、実際のセリフは“I will bring you in.”だった。一般的に、日本語は漢語名詞を中心に文の意味が作られる。しかし、**英語で中心となるのは動詞と前置詞**である。日本人の書く英語は、やはり名詞中心になってしまい、まず日本語の名詞を辞書で引いて英語にしてしまう。しかし、**自然な英語を書くには、日本語の名詞のことは忘れて、文全体で抽象的なレベルで意味を考え、まず動詞を考えるべき**である。このことは、英作文などの参考書にも書かれているのだが、映画を「熟見」しながら英語のセリフと字幕の日本語を比べると、それが実によく見えてくるのである。この「体験に基づく納得と気づき」も学習には——特に自分にしみついた日本語スキーマを打ち破って英語スキーマに書き換えるには——とても大事なことである。

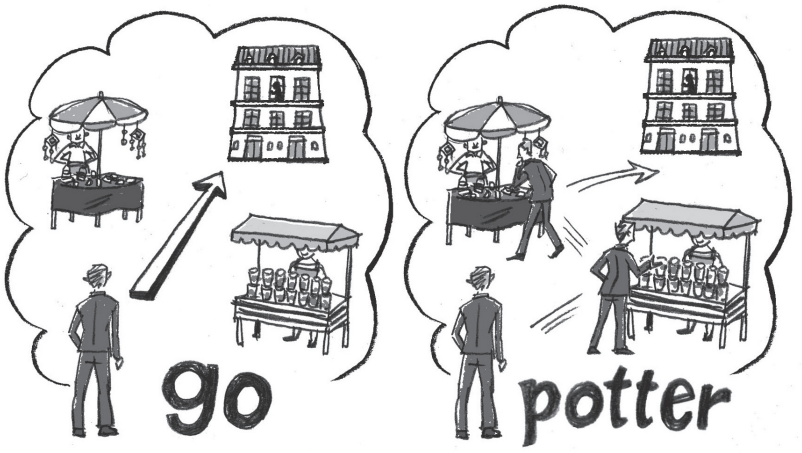
字幕翻訳の楽しみ方

英語のセリフが頭に入ってきて、さらに「熟見」を続けると、字幕翻訳家のプロの技量も楽しめるようになってくる。映画の日本語字幕は字数が非常に限られているので、ギリギリの字数でかっこいい日本語のセ



リフを考えなければならない。この英語のセリフを自分ならどう日本語にするかな、と思うのである。『007スペクター』では、脚本家の技量にも感嘆したが、日本語の字幕翻訳も、さすがプロと思う部分が随所にあった。例えば、悪の組織の拠点がどこにあるのかをボンドとヒロインがGPSで突き止め、それが地図上の空白地帯で何もない場所だったシーン。英語では“Where was he going?”とヒロインが尋ね、ボンドがたった一言“Nowhere.”と答える。この答え方も端的で実にかっこいいのだが、字幕では「砂漠だ」だった。「何もないところ」では間が抜けてしまうし、映像に映っている地図では、砂漠だということはよく分からない。「砂漠」という日本語を出してしまうことで、たった一言で、状況までもぐっと分かりやすく伝えることができるのである。何も考えずに映画を見ているとストーリーを追うことだけに集中してしまい、こういった細部のセリフを聞き流してしまうが、字幕を意識的に「味わう」と、見る側の理解の度合を推し量り、必要な情報を最小限の日本語でスタイリッシュに伝えるという字幕翻訳家の苦労と工夫が見えてくる。これは、自分の日本語の表現力を磨くのにも役に立つし、そもそも仕事をするうえで最も必要とされる能力である。よい英語が書けるようになることの前提は、まず日本語でセンスのよい言語力を持つことだ。

映画そのものだけではなく、そこから見えてくるプロの技量や、日本



語と英語の構造的な違いを発見し、楽しむ。このように楽しみながら何度も「熟見」していたら、『007スペクター』のセリフは最終的に全て頭に入ってしまった。頑張って暗記したのではなく、「自然に頭に入った」と言ったほうがよい。このように心に刻み込まれた単語や表現は、確実に「生きた知識」になる。単語を使った文だけではなく、そのときの俳優の声音（こわね）や表情までが一緒に記憶にインプットされ、「こういう気持ちのときにこの単語を使うんだな」という実感が単語の意味の記憶に付着されるからである。

動詞potterに込められた意味

映画の中に“I got to explain to him how one of our agents decided to potter off to Mexico, all on his own, and caused an international incident.”というセリフがある。ボンドがテロ組織の暗殺者を追って、許可なしにメキシコに行き、満員のサッカースタジアムを爆破するというテロ計画を突き止め、そのテロリストを殺害し、その際（たぶんテロリストの爆弾に弾丸が当たって）ビルを吹き飛ばしてしまうなどという大騒ぎを起こした後に、帰国して上司に呼び出された場面で上司が言ったセリフである。この部分の上司のセリフはけっこう長いのだが全て思い出せるし、表情や声音までばっちり記憶されている。

このセリフの中のpotterという動詞が気になった。potterは「陶工」という意味の名詞として使われるこ

とは知っていた。動詞としては「ぶらぶら歩き回る」という意味で使われることも何となく知っていた。Cambridge online Dictionaryでは、“to move around without hurrying, and in a relaxed and pleasant way”と記述されている。実際の映画では、ボンドは命をかけて戦い、飛び回っているので、とても「ゆっくり、リラックスして」どころではないのだが、ボンドの勝手な行動を苦々しく思っている上司の「勝手に遊びに行って好き勝手なことをして」という気持ちが込められたこの動詞が使われたのだろう。

単なる「行く」ではないpotter off

ちなみに“potter off to Mexico”という言い方も非常に英語的で、英作文のコアになる表現である。日本語では、移動を表す動詞は限定的で、「どのように」その行為をするか、という情報はオプショナルに表される。このフレーズも、あえてpotterに含まれる「どのように動き回るか」という情報を含めて忠実に日本語にするのなら、「勝手にふらふらメキシコくんだりまで行って」という感じになるのかもしれない。しかし、この文を日本人が普通に聞くと、「メキシコに行った」という命題だけが記憶に残る。日本語スキーマが働いてしまうからだ。だから日本人が英語を書くとき、“He went to Mexico.”のように、「どのような」という情報が抜け落ちた「行く」だけを拾い上げた英文を作ってしまいがちなのである。

映画の中では随所に“potter off to Mexico”のように、動作の特別な様態を表す動詞に前置詞をつけて、移動を表す表現がされている。「様態動詞＋前置詞」で、特定の様態で移動を表す構文、というのは必ず英文法参考書には書いてあるはずだが、この構文をこのように抽象的に覚えても、「生きた知識」にはならない。しかし、好きな映画の中で、「あ、ここでもこの構文が使われている！」という感慨とともに、複数の動詞、前置詞の組み合わせで文が状況ごと記憶に焼きつけば、この構文がやがて身体の一部の「英語スキーマ」になり、自然と口に出せるようになるだろう。

ただし、１本の映画では、いくら「熟見」しても英語スキーマが身体化されるとは約束できない。あることが身体化されるところまで行くには長い間の訓練が必要である。「聞き流すだけで英語が自然と口から出る」



という英語教材の広告をよく見るが、記憶の認知メカニズムを考えるとき、人間の認知の仕組みにまったく反していることなので、とても本当だとは思えない。

子どもが母語を覚えるときは、このように意識的に注意を向けることはしないが、単語を言語の他の要素と切り離して記憶するのではなく、状況や構文、文法を一緒に記憶するということをしている。そこから、単語の意味を抽象化して少しずつ覚え、並行して文法や構文の形を抽象化しながら覚えていく。だから母語の知識は「生きた知識」なのだ。その意味で今回提案した映画「熟見」法は、外国語を「生きた知識」にしていくのに、認知的には理屈にかなった方法である。しかし、限界もある。この方法だけでは、似た意味を持つ他の単語とどのように使い分けるのかは分からない。例えば、potterのように「ゆっくり、遊びながらぶらぶら歩き回る」のような意味を持つ動詞として、私が知っている限りでもamble、strollなどがある。これらの類義の動詞の意味の違いを調べるときは、コーパスが最適である。コーパスで意味を深く調べる時間はなかなか取れないと思っている読者は、映画を「熟見」して、気になった単語があったら、その単語と類義の単語の用法、コロケーション、文脈の違いなどを調べてみるとよいと思う。気になった単語なら、その意味を深く知りたいというモチベーションもあるだろう。

好きな映画を「熟見」しよう

映画「熟見」法を実践するなら、何度も見たいと思うような自分の好きな映画を選ぶことが何より大事だ。魅力を感じるものでないと、繰り返し見ることが嫌になってしまう。ただ、自分の英語力で手に負えるレベルであることも大切だ。前回述べたように、映画はテキストやCDに比べて情報が豊富なので、スキーマで聞き取れない部分を補いやすい。最初にその映画を見るときには、字幕なしでどのくらい大ざっぱなストーリーが追えるかを確かめるとよいだろう。字幕なしではまったくストーリーが分からない映画は、自分の英語力には余る、あるいはスキーマが足りないものである可能性が高い。また、長いセリフで複雑な心の動きを表現するような映画は、この方法には向かないかもしれない。文が長いと、文全体を覚えるのが大変で、映画のセリフを頭に入れる前に、嫌になって挫折してしまいやすい。その点で、アクション映画はよいと思う。『007スペクター』は、セリフなしのアクションシーンが多いうえに一文が短く、複雑な文がほとんどなかったので、自然にセリフを全部頭に入れることができたのである。アニメが好きな人ならアニメ映画を「熟見」するのでもよいだろう。

次号予告

第11回 フィンランドの英語教育から考えたこと